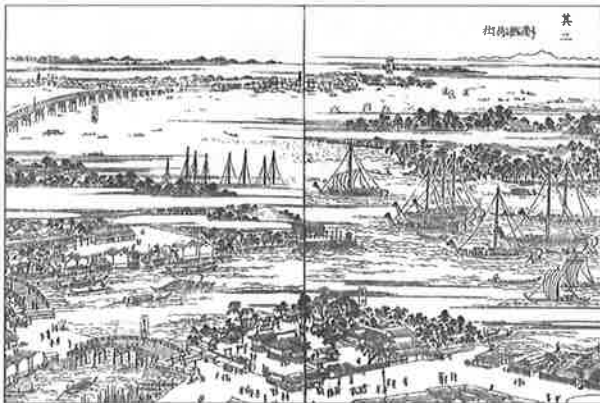


## 隅田川と江東地域 ②

## 隅田川の橋と深川住民

江東区深川江戸資料館



『江戸名所図会 湊稲荷社』(天保7年1836)  
 下方の神社が湊稲荷神社(現鉄砲洲稲荷)で、江戸湊の鎮守とされています。右手の石川島・佃島の間から、上方からの下り荷物を積んだ大型船が入港しています。その物資を受け取る側として、深川の町々、手前の八町堀なども描かれ、当時の江戸経済のシステムを描きだしています。

隅田川には現在17の橋が架けられ、それぞれが特徴のある形状をしています。橋の多くは関東大震災以後に架けられたもので、江戸時代の橋は5つでした(表参照)。

隅田川は大河であり、架橋や修復、維持管理には多大な経費と労力を要してきました。今回は、江東地域に近い両国橋・新大橋・永代橋の3橋と深川に暮らす人々について、紹介しましょう。

## 江東地域の3橋

①両国橋 江戸市中に架かる隅田川の橋としては最初の橋で(隅田川の橋としては千住大橋に次いで2番目)、当初は「大橋」でしたが、武蔵・下総両国に架かっていたことから両国橋となりました。

架橋の契機は明暦3年(1657)の振袖火事(明暦の大火)で、本所深川開発事業の一環として架けられました。翌年7月架橋が命ぜられ、寛文元年(1661)に竣工しましたが、その場所は江戸城常磐橋御門から北東に伸びる、江戸町人地の中心・本町の通り(現大伝馬本町通り)の延長線上にあたる場所に架けられました。橋はまさに将軍の橋として位置付けられました。

橋西岸には火災による延焼を食い止めるために広小路が設けられました。通りはここで両国橋を越えて本所・深川へ向かうコースと、神田川に架かる浅草橋御門から隅田川に沿って奥州道中へ向かうコースに分か

れます。さらに浅草橋御門の西側には郡代屋敷があり、関東幕府直轄領の村々から訴訟や請願のために村役人が訪れるため、公事宿が多かった所です。交通の要所、公事宿の存在などから、地方からやってきた人が両国広小路を江戸随一の盛り場へと押し上げました。

しかし、一方で両国橋は公儀の橋で、幕府が維持管理の経費を負担する御入用橋だったことから、度重なる架替え・修復に費用がかかることから「金食い橋」ともいわれました。

②新大橋 元禄6年(1693)7月に架橋が指示されて、同年12月7日に竣工しました。西岸は浜町にあった水戸藩邸で、東岸は安宅丸(将軍が乗船する御座船だったが、維持費が膨大なため天和2年=1682年廃船になった)繫留地跡付近に定められました。

要した経費は2343両余。後年享保4年(1719)の大破に伴う修理では6千27両もの経費を要し、架橋後の維持経費にも多額の費用がかかりました。橋の名前は、両国橋が当初「大橋」で、その次にできたことから新大橋となりました。

③永代橋 永代橋は元禄11年(1698)の竣工です。架橋以前は「深川大渡し」と呼ばれる渡し場があり、富岡八幡宮への参詣は、この渡し船によっていました。隅田川河口にあたるこの付近の渡し船は、おそらく多くの危険もあったことでしょう。そして明治36年(1903)に相生橋が架けられるまで、約2百年にわたって隅田川最下流の橋でした。

深川大渡しの時代には渡し銭を徴収していたため、それにならって架橋当初は、橋を渡る人から1人あたり2文、のち1文の料金を徴収していました。「永代」の名は、この付近が永代島・永代浦と呼ばれていた、5代将軍徳川綱吉の長久と幕府の「永代」の存続を願ったことから付けられたといえます。

創架年代	橋数	橋名(創架順)
江戸時代以前	5	千住大橋・両国橋・新大橋・永代橋・吾妻橋
明治・大正12年以前	3	厩橋・相生橋・白鬚橋
関東大震災～太平洋戦争	5	駒形橋・蔵前橋・言問橋・清洲橋・勝鬨橋
戦後	4	佃大橋・隅田川大橋・桜橋・中央大橋

表

## 橋の存続と住民

①**両国橋** 橋を維持するにあたり、架橋直後から周辺の船持ちたちに課せられた役がありました。「役船小頭共差出候書付」によれば、①満水時上流から流れてきた船・材木等の撤去と橋の養生、②日常流されてくる物の除去作業、③出火時の出動、④將軍御成の際役船5艘の調達、⑤將軍御上り場の清掃、といった内容があげられています。ではこの役の担い手はどのような人たちだったのでしょうか。

江戸幕府が編纂した『町方書上』によれば、役を担う人として、「両国橋御役船小頭 深川海辺大工町 家持庄三郎 家持平七」等の名があげられ、役船仲間の人数は71人と記されています。

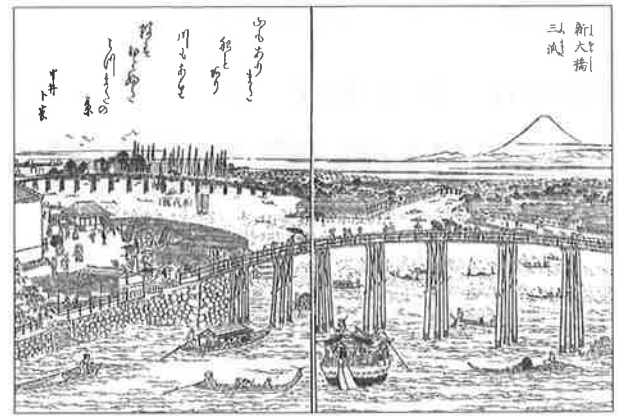
海辺大工町とは、小名木川南岸の町で、川の開削と同時に開かれた南岸に展開する町です。現在の江東区清澄・白河の北辺にあたるこの地域は、前出の『書上』では元和～寛永初年(1620年代頃)に「奥川舟着岸之湊町」として町場にしたい旨の願いが出されて、町場になったところです。

江戸湊に入ってきた船は、上方からの「下り荷物」などを積んでいます。それは神田や日本橋・京橋・深川など市中の河岸・物揚場に運ばれます。それには大型の船ではない、川幅が狭く、川底も深くない掘割へも搬送できる、茶船・舢舨(はしけぶね)などが使われました。その担い手こそ深川に住む人々でした。その茶船・舢舨などの持ち主で組織する役船仲間71人のうち深川海辺大工町の居住者は約半数の36人を数え、中心的な役割を果たしていました。

彼らが両国橋の役を担ったのは、役負担の代わりに両国橋辺の河岸へ人や荷物を運送することを認めてもらうねらいがありました(『町方書上』)。まさに生活の基盤を確保するための役負担でした。

②**新大橋** 橋の東西には物揚場がありました。ここを使用する人々は両国橋の役船仲間と同じく、小舟で江戸市中や深川の河岸・物揚場へ荷物を配送していました。彼らは物揚場の使用を許可してもらうため、1満水時など橋に流れてきた材木等漂流物の除去、2火災の際、橋下へ向かい橋桁を消火、3本所での軽微な普請の用材運搬や役人見廻り用の船の調達を役としていました(「新大橋東西物揚場相糾候儀申上候書付」)。この役を担ったのも深川六間堀町や深川海辺大工町で船稼ぎをする人々でした。

延享元年(1744)新大橋は、それまでの御入用橋(架替えや修復を幕府の費用で行う)から町持ち(同様に架替え等の費用を周辺町々が負担)に代わりました。30年程前から連年のように水害時の修復が相次ぎ、深



『江戸名所図会 新大橋三派』(天保7年1836)  
手前に新大橋、後方に永代橋が描かれ、中央に箱崎があり三つ又に分かれています。

刻な財政負担となっていたため、幕府は橋の撤廃を考えました。しかし橋の存続を願った周辺町々は自ら維持管理するから撤廃しないでほしいと嘆願して聞き入れられました。周辺町々の負担は増加しても、橋の存続を願った結果です。

③**永代橋** 享保4年(1719)新大橋と同様に永代橋もまた撤廃案が検討されています。これは永代橋・新大橋が大破して新規の架替えが必要となり、検分の結果永代橋は新大橋よりも工費がかかる、また永代橋のほうが通行量が多いが、新大橋のほうが両国橋に近く、本所武家地にも近いことから、こちらを残して、永代橋を取り払うという計画でした(『重宝録』)。しかし、橋両側の町々から存続の嘆願がなされて、町人による維持が決まりました。享保11年(1726)からは、期限付きですが一人あたり2文の橋銭の徴収も行われました。

永代橋は文化4年(1807)富岡八幡宮祭礼の際に大勢の群集により落橋するという大事故が起きました。翌年架け替えられ、同6年(1809)には、永代橋・新大橋・吾妻橋3橋の維持管理・架け替えを江戸十組問屋が請け負うという、三橋会所さんきやうかいしょが作られましたが、10年後の文政2年(1819)には会所は廃止され、以後は御入用橋として存続しました。

## 深川住民と橋の意味

自分たちの生活基盤を安定させるため、両国橋や新大橋の水防役を担った深川海辺大工町の人々。小舟を持ち江戸湊に入ってきた荷物を搬送する仕事は、江戸経済を土台から支える仕事でした。橋の維持が通行のためだけでなく、もっと深いかわりをもっていたことを伝えています。

また維持管理にかかる費用と財政難から、橋の撤廃に対する住民の取り組みも見逃せません。この撤廃反対のおかげで現在まで橋が存続しているのでしょうか。